

創造への意欲を育む造形講座の環境構成

－子どもと支援者との相互行為分析からの考察－

山 中 慶 子

Environmental Design for Art Workshop that Foster Creative Motivation:
Analysis Based on the Interaction between Children and Supporters

Keiko YAMANAKA

長崎女子短期大学紀要 第51号 令和7年度 別刷

Reprinted form

Nagasaki Women's Junior College Annual Report of Studies, 51 : 27 – 38

2026

論 文

創造への意欲を育む造形講座の環境構成

－子どもと支援者との相互行為分析からの考察－

山 中 慶 子

Environmental Design for Art Workshop that Foster Creative Motivation:
Analysis Based on the Interaction between Children and Supporters

Keiko YAMANAKA

キーワード：造形表現、公開講座、創造的教養、相互行為分析

1. はじめに

1-1. 研究の背景

本論は、一般市民の創造活動の機会の必要性について整理し、その支援のための公開講座の内容及び環境構成について検討するものである。

学校教育において、児童・生徒は図画工作科や美術科などの教科を通じて造形による表現活動を行っている。このような表現活動では、一定の目標や内容が定められており、各学年の発達過程に適した活動が行われる。これらは、児童・生徒の興味関心の広がり、表現する力や手指の巧緻性の向上、社会性の発達の観点から必要な活動であると考えられるが、その経験が生涯における創造活動につながるかは定かではない。つまり、教科で定められた表現活動とは別の、インフォーマルな場、若しくは学校教育を終えた後に創造活動を行う機会の減少が推察される。このことについて、縣拓充・岡田猛は、「創造に関わる研究が進む一方で、多くの市民が創造活動の過程に触れる機会を持たないという現状が存在している」¹⁾ことに言及している。そして、「創造活動について理解し、また日常の生活レベルでそれらと関わることのできる市民（「創造的教養人」）を育成」²⁾することの必要性を指摘している。

本稿では小中学生親子対象の公開講座における

参加者の学び方に着目し、子どもが学校教育以外の創造活動の場で、いかに学びを得ているかを考察する。それらの経験は、日常の中で、主体的に創造活動に親しむ態度に寄与する可能性があると考えられるからである。そのため、まず縣・岡田の提唱する「創造的教養」について整理する。そして、造形をテーマとした公開講座が創造的教養を育む一助となるのかを、実施の記録から検討する。さらに、近年3回の公開講座参加者の行為や発話の記録から、創造的教養の育成に寄与と思われる場面を観察・分析し、創造的教養を育む公開講座の環境構成や支援について検討する。

1-2. 「創造的教養」とは何か

縣・岡田によると、科学者やデザイナー、アーティスト等、非凡な才能をもつ者は「創造的熟達者」と呼ばれ、それらの創造的熟達者と一般市民の間には、「認知能力や思考過程に、質的・根本的な差異がある」³⁾と考えられ易い。しかし、創造的熟達者は、生まれ持った才能や天才的なひらめきに頼って活動しているのではなく、「創造的なパフォーマンスには、当該領域の活動に携わる時間（time on task）の莫大な蓄積と、構造化された知識が前提となっている」⁴⁾ことが明らかにされている。また、「問題発見に時間を割き、外

化や類推を用いて試行錯誤しながら、徐々にアイデアやコンセプト、あるいは作品そのものをより創造的で精緻なものに発展させている」⁵⁾ことが、アーティストの思考過程や認知活動の理解にむけた研究によって明らかになっている。

一方、一般市民は様々な制作の過程や方法について学ぶ機会に乏しい。また、前述のように創造することは得意な才能を持つ人に限定されたものであり、自分たちには関係のないものといった意識も推察される。しかし、縣・岡田は、市民が創造活動について理解し、創造や表現という営みに関わる意義はあるという。創造活動の「個人にとっての意義」、「社会にとっての意義」について、縣・岡田の論を簡潔にまとめる⁶⁾。

＜個人にとっての意義＞

- ・鑑賞へのモチベーションや深化
- ・創造それ自体から得られる快感
- ・創造に関わる領域一般的な知の獲得

＜社会にとっての意義＞

- ・文化の民主主義的な協働構築
- ・多様な市民の参与による創造活動の促進

縣・岡田は、これらの理由から、創造活動について理解し、新しいものを生み出す活動に参加する市民を育むことの重要性について述べている。そして、「1) 創造活動の過程や方法についての理解、及び2) 日常生活の中で何らかの創造活動と親しむ態度や習慣」⁷⁾の2つの要素が構成する概念を「創造的教養」と定義している。

創造活動について、井庭崇は、「何かを『つくる』ことは、つくり始める時点ですでに自分の中にある何かを外に出すということではなく、つくることで新たな発見が生じ、学びが深まり、成長につながるという『構成的』なものである」⁸⁾という。つまり、つくる活動の過程で何かを発見し、学び、変化することが創造活動における学びの本質であるといえる。また、西野範夫が、造形教育で育成すべき基礎は「造形による意味生成の創造的な能力」⁹⁾であるというように、材料などからイメージを膨らませ、かたちを作る過程で新たなことに気づき、自分にとっての新しい意味をつくりだしていくことが、日常生活でも汎用可能な力

の育成に寄与するといえるだろう。

それらは、図画工作や美術の中だけではなく、学校教育以外の場でも必要な経験である。なぜなら、その経験の繰り返しが、日常で創造活動に親しむ態度へとつながり、結果「創造的教養」の素地が生まれ、生涯を通しての発見や学びにつながるということが考えられるからである。

1-3. 公開講座が「創造的教養」を育む可能性

これまで、本学で小中学生親子対象の造形をテーマとした公開講座を6回実施した。そして、2020年～2022年に実施した3回の公開講座記録から、対象者への学習効果を考察し、参加者のニーズについて研究を進めてきた。その結果、以下のことが考察された¹⁰⁾。

- ・公開講座のテーマは、子どもがこれまでに体験したことがないもの、また日常では体験することが難しい造形（技法など）が適している。親子で協力して制作し、達成感を味わえるような、少々難易度の高いテーマが良い。
- ・作品のその後に思いを馳せることも、制作のモチベーションにつながるため、「飾る」「使う」「見せる」など、その後の目的が想定できるテーマが適している。
- ・目的をもって親子で何かに取り組む経験は、保護者が子の成長を実感する契機となる。制作のプロセスを共有することができる「造形」をテーマにした公開講座は、その機会になり得る。
- ・集中して自分のイメージを形にしたり、より良いものを創造したりする体験は、子どもだけでなく大人にも望まれている。

本講座の特徴は、子どもだけでなく、保護者も一緒に参加することである。したがって、子どもの発達過程に対して難易度が高いと思われる活動でも、大人の支援を受けながら制作を行うことができる。また、保護者にとっても、子どものイメージ力や集中力を間近で見る経験になるとともに、自身も創造活動に携わることで達成感を味わう機会になっていることが上記の調査により明らかになっている。

しかし、これまでの調査では、創造活動過程の子どもと大人の相互行為には触れてこなかった。活動のプロセスにおいて、子どもと大人が関わる場面には、目的達成のための課題が想定される。このような課題を解決する過程で、子ども達は充足感を味わい、知識・技術を得ていることが考えられる。これは、縣・岡田の述べる創造活動の意義「創造それ自体から得られる快感情」や「創造に関わる領域一般的な知の獲得」に関係するだろう。これらの研究結果を踏まえ、子どもと大人の相互作用に着目するため、2023年以降の公開講座では、学生スタッフ数名が参加し、複数の兄弟児に対応できるようにした。テーマには、大人の支援を前提とした、難易度の高い工程を含む内容を設定している。

2. 目 的

本稿の目的は、公開講座の参加者が、他者との相互行為を通して自己の課題を解決するプロセスを分析し、講座の内容、及び人的環境を含む環境構成について検討することである。同時に、「創造的教養」を育むための公開講座として適したテーマについて示唆を得る。

3. 調査の方法

3-1. 予備調査

まず、参加者である子どもたちが、どのような支援を求めているのかを知る必要がある。そこで、2023年・2024年に実施した公開講座「わくわくサマクラフト」の実施概要とアンケート結果から、学習者が課題を解決するための支援と適した環境について考察した。

2023年実施の公開講座から、造形表現ゼミナールの学生数名がスタッフとして参加している。2023年実施の「藍染め」は、学生が未経験の活動であり、参加者の支援が難しいことが予想されたため、事前にゼミナールの授業の中で「藍染め体験」を実施した。学生の経験から出た課題や、難しいと思われる工程をまとめ、参加者に適した支援のあり方について考察した。

2024年実施の公開講座では、マスキングテープ

をつかった彩色や、ラミネーターの使用を工程に組み込んだ。参加者の行為や発語から、困難な工程の際に、参加者がどのような支援を求めているかについて考察した。

予備調査で明らかにしたいことは、①参加者がどのような支援を求めているのか、②適した環境（物的・人的）はどのようなものか、である。

3-2. 本調査

予備調査の結果を受け、2025年実施の公開講座は「くぎ打ち」をテーマとして実施した。日常の中で経験が乏しく、特に低学年児童にとっては、大人の支援を必要とする工程である。

1組の参加親子の行為・発語をトランスクリプト分析することで、子どもが大人の支援を受けながら自身の課題を解決する過程を明らかにする。

そして、予備調査、本調査の結果を基に、創造的教養を育むための公開講座のテーマ、内容、及び環境構成について検討する。

3-3. 倫理的配慮

公開講座参加者には、写真撮影の許可を取り、顔や名前など個人が特定されない範囲で使用することを伝えた。学生スタッフには、研究の意図と内容を伝え、写真と発話等の記録の使用に同意を得た。調査対象となる保護者には、研究の目的と内容を伝え、撮影及び記録の使用に同意を得た。

4. 公開講座「わくわく★サマクラフト」 実施概要

4-1. 「親子で藍染め体験&ミニうちわ」(予備調査)

開催日	2023年8月6日(日)
開催時間	10:00~12:00
参加者	15組(子ども17名 大人16名 計33名)
学生スタッフ	3名

(1) ゼミナール活動での実践と省察

藍染とは、藍の葉から抽出した染料で布を染める日本の伝統的な染色方法である。本来は、藍の

葉（主に「タデアイ」）を水に浸して発酵させ、インディゴを抽出して、空気にさらして酸化させ染料を生成するが、公開講座では手軽に染めを楽しむことができる人工藍の染料を使用した（藍染め染料セット 紺屋藍）¹¹⁾。

布地は、参加者がTシャツとエコバックの2種類から選べるようにする。まず、ゼミナール学生が2種類の生地での藍染を試すこととした。Tシャツは、薄くて柔らかいコットン生地が染色に適しているため、白地の各サイズをそろえた。エコバックもコットン生地のA4サイズを準備した。事前に、生地の糊を落とすため水洗いをおこなった。藍染の模様は、輪ゴムや糸で絞ることで染液が染み込まない部分を作り、白抜きすることで表現する。学生は、模様のパターンと方法を調べながら、好みの大きさや場所を考え、絞りを行った。その際、「これは、小学生には難しい」「道具を変えたほうが使いやすい」など、公開講座参加者の行為を想定して制作を行った。

染めの工程では、事前に藍染液を水に溶いておき、布を浸し数分間もみ込む。5分～10分を目安にし、濃く染めたい場合は長い時間浸すように促した。学生はビニール手袋を着用していたが、手首口から藍染液が染み込んでしまうことが分かったため、公開講座では輪ゴムで手首部分を止める提案があった。染液から取り出した布地は、水洗いをする。この時、染液から取り出した直後の布地は黄色～緑色をしているが、藍染液が空気に触れて酸化することで藍色に変化する。水に藍色が出なくなったら、水洗いを終え、色の定着を図るために最後にお湯で洗って脱水し、絞りの輪ゴムや糸を外して日陰で乾かした。

これらの工程を経て、学生から挙げた改善案は、以下の4点である。

- ・小学低学年でもできるような、絞りの模様の提案を行う。布地をびょうぶ折りにして輪ゴムで巻く「折り絞り」、割箸に布地を巻き付けて輪ゴムでとめる「巻き上げ絞り」、布地をつまんで輪ゴムで巻く「根巻絞り」、布地を丸めて3～4本の輪ゴムでとめる「むらくも染め」、布地でビー玉を包み輪ゴムでとめる「ビー玉絞り

染め」が適していると考えられる。使用する道具についても検討する。

- ・染色液に布地を浸す際、手が汚れないようにビニール手袋の口をしっかりと止められるように工夫する。
- ・絞り→染色→水洗い→お湯洗い→乾燥の工程をスムーズに行うための動線を検討する。
- ・完全に乾かして持ち帰ることが難しいため、持ち帰りの方法を工夫する。

(2) 公開講座の様子

公開講座当日は、以上の点を考慮して制作を行える環境を整えた。藍染は初めてという参加者が大半であったため、説明に静かに耳を傾け、資料と照らし合わせる様子が確認された。絞りで模様を形づくる工程では、どんな模様にするか、どの場所に模様を入れるか、を親子で相談する様子が見られた（図1）。学生スタッフは、自分の作った藍染作品を見せながら、絞り方についての説明を行った。

絞りが終わった参加者から、染めの工程に移った。参加者のビニール手袋の口を輪ゴムで二重に



図1. 輪ゴムを使った絞りの様子



図2. 藍染液での染色の様子



図3. 染色後の乾燥の様子

して止め、染液に布を浸す時間を学生スタッフが測ることで、スムーズに染めの作業を行えるようにした。また、水場に近い机上で藍染を行い、そのまま水場に移行することができるようにした(図2)。洗いの工程を終えた参加者は、それぞれの布地を脱水し、絞りの輪ゴムや糸を外し、広げて乾かした。ここで初めて、模様を目にすることができる。参加者からは、「きれいな模様があ

きた」、「こんな風になると思わなかった」、「面白い形」などの声が上がった。水洗いを終えた参加者のバケツにポットからお湯を注ぎ、色止めのための湯洗いを行った後、藍色止め剤を溶解させた液に3分程浸し、広げて乾燥させた(図3)。

布地を乾燥している間に、ステンシル技法を用いたうちわの制作を行った。全員の製作が終わったところで、ジップロック(LL)を配布し、藍染作品を畳んで持ち帰るよう促した。表1は参加者の感想の抜粋である。

4-2. 「すずしいをつくろう 風鈴&スライム」 (予備調査)

開催日	2024年7月28日(日)
開催時間	10:00~12:00
参加者	13組(子ども14名 大人14名 計28名)
学生スタッフ	2名

表1. 「親子で藍染め体験&ミニうちわ」参加者の感想

<p>参加者の感想(子ども)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ぬのの、しぼり方によって、もようが変わってとても面白かったです。どこにどのもようをつけるかを考えるのが楽しかったです。 ・もようを作るところはむずかしかったけど、<u>どんなもようができるかな?</u>というワクワク感がとても楽しかったです。 ・ビー玉をわゴムでまくのと、わりばしを、わゴムでまくのが1番楽しかったです。またやりたいです。 ・よくできた。ちゃんと色がそまった。また来たい。 ・夏休みの工作ができて良かった。これからも大切に使っていきたい。 ・あまりできないことができて、とても楽しかったです。 ・作業はたくさんあって大変だったけど、楽しかった。 ・はじめてやったけど、たのしかった。 ・さいしよは、ふあんだったけど、できたらいいかんじで良かった。 <p>参加者の感想(大人)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初めての体験で、<u>どんな形になるのかドキドキ</u>しながら作り、楽しかったです。 ・子どもと一緒にモノを作るということができて、とても良い体験になりました。 ・<u>どんな模様になるのか、出来あがるまで分からないワクワク</u>感がありとても楽しかったです。説明も分かりやすく、子どもも安心して作っていました。 ・夏休み、まだどこへも遊びに連れて行けてなかったので、ケンカしながらも親子で同じものをつくって楽しかったです。今までは、親の指示通りやっていたのに、<u>自分の意見が出てきて、成長も感じました。</u> ・初めて藍染めをしましたが、とても楽しかったです。夏休みの作品が一つ出来上がり、親としては助かりました。 ・短時間の作業ですが、工程があって、何事も作るというのは大変だと感じました。同時に、<u>子供と過ごせて良かった</u>です。 <p style="text-align: right;">※下線は筆者による。</p>
--

(1) テーマと材料・用具について

2024年度の公開講座のテーマは、「すずしいをつくろう」とし、耳で聞いて、見て、触って涼しく感じられる作品を制作することとした。

日本の夏に代表される風鈴は、素材、形、大きさによって音色が変わり、家庭でも窓辺に吊るすことで涼しげな音色を楽しむことができる。本体には、ガラスや金属、陶器などの素材が用いられることが多く、素材によって音色も異なる。また、一般的に大きい風鈴の音は低く、小さな風鈴の音は高く余韻も短い。風鈴の素材は、絵付けが容易であり、音も涼やかな陶器を使用することとした(彩風鈴 陶器)¹²⁾。絵付けの道具は、広範囲への色付けと、繊細な絵柄の装飾を想定し、絵の具と耐水性ペン(プロッキー)を用意した。今回のような半球状の風鈴の面に絵付けを行う際、定規を使用することができない。したがって、着色しない部分にマスキングテープを貼り、彩色してから剥がす工程を参加者に提案することとした。

短冊は、通常、紙素材に絵付けを施すことが多いが、セロハンや花紙などの透ける素材を重ねてラミネートすることで、透明感のある涼し気な短

冊を制作できるようにした。

(2) 公開講座の様子

講座の始めに、様々な素材の風鈴についての説明を行った。そして、講座での風鈴制作の工程をスライドで示し、マスキングテープを用いた彩色について、実際の風鈴を使って説明した。制作に入ってから、親子で色味を相談して彩色する様子(図4)、絵の具やペンを使って絵柄を描き進める様子が確認された。大半の子どもがマスキングテープを用いての彩色にチャレンジしており、



図4. 親子で色味の相談をする様子



図5. 親子で協力してマスキングテープを貼る様子



図6. スライム制作の様子

親子で協力しながら曲面にマスキングテープを貼っていく姿が確認された(図5)。乾燥させた後にマスキングテープを剥がす工程では、美しいラインの仕上がりに歓声が上がった。子どもが風鈴本体の彩色を行っている際、保護者が短冊に挟み込むセロハンの切り抜きを行っている場面も見られた。

全員の風鈴制作が終了した後、触覚と視覚で「すずしい」を感じられるスライムづくりを行った(図6)。これは、大人も参加できるように参加者総数の材料を準備した。プラスチックのクリアカップの内側に水性ペンで着色し、PVAと水を半量

表2. 「すずしいをつくろう 風鈴&スライム」参加者の感想

参加者の感想 (子ども)

- ・とくにふうりんづくりが、いろんな絵をかいたりマスキングテープをつかってまっすぐな線をかいたり楽しかった。
- ・ふうりんがとてもむずかしかったけど、楽しかった。
- ・せつめい分かりやすく、なつやすみの思い出になりました。またきたいと思ったよ♡こんどはなにかなのたのしみになっています。
- ・ふうりんの絵をぬるのが楽しかった。チリンチリンってきれいな音だった。スライムは、最初ドロドロしていたのにホウ砂水を入れてかたまってくるのがおもしろかった。
- ・すらいむを水にぬらしたらぶるぶるになって楽しかった。
- ・なかなか家で作ったりしない風鈴やスライムなどを作れて楽しかったし、良い思い出でした。分かりやすく説明してくださり、すごく楽しかった。
- ・初めてスライム作りをして、作り方がよく分かりました。風鈴の絵付けも楽しくて良い作品ができました。

参加者の感想 (大人)

- ・作り始める前の説明も分かりやすく、制作途中で先生や学生のお手伝いの方が「かわいいね」とか「よくできたね」と頻りに声をかけて頂き、子どももそれが嬉しく自信になって制作意欲がさらにわいたようでした。スライム作りも興味しんしんで、すごくワクワクしながら楽しんでいました。
- ・普段子どもと過ごすことも少ないので、協力し合って作業できたので大変よかったです。
- ・説明も分かりやすく、見本もあって作成しやすかったです。子どもたちにも声をかけてくださったので大変楽しく作成できました。ありがとうございました。
- ・風鈴は前から欲しかったので、手作りだともっと愛着がわいて、毎年夏が来るのが楽しくなりました！子どもそっちのけで真剣になってしまいました。
- ・子どもの楽しそうな様子を見てよかったです。講座は、楽しく親切に分かりやすく、低学年の子どもも楽しくできました。ありがとうございます。
- ・ずっと楽しみにしていました。今日も、朝から早起きしてワクワクしている様子で、とても嬉しかったです。集中して制作に取り組む姿が見られて良かったです。家でもやってみようと思いました。
- ・風鈴づくりもスライムも初めてでしたが、童心にかえってとても楽しくできました。親子で一緒に取り組む機会もなかなかないので、よい思い出になりました。
- ・夏休みの親子教室は、コミュニケーションがとれるので良かったです。また参加したいと思います。

※下線は筆者による。

ずつ注ぎ、ホウ砂水を少しずつ加えて割箸で混ぜると、ゲル状のスライムが出来あがる。これらの工程は授業の中で実践したことがあったため、学生スタッフは、参加者の傍でホウ砂水の量や柔らかくしたいときは水を加えることなどを積極的に説明していた。表2は参加者の感想の抜粋である。

(3) マスキングテープ使用時の参加者の相互行為分析

風鈴の曲面にマスキングテープを貼る際の参加者の相互行為をトランスクリプトに示す(表3)。S児は小学5年生であり、大学生の姉と共に講座に参加している。表3は、風鈴の下の部分に赤の絵具で彩色をし、乾燥させた後の場面である。

まず、S児が白の絵の具をパレットに出し、「やってみる::」と言う。パレットには既に赤の絵の具があり、混色によってピンクをつくる。姉が風鈴の赤い部分にマスキングテープを貼ろうとするが、S児が「もっと上」だと主張する。姉は赤の上にピンクを塗ることを想定していたが、S児は白い部分を挟んでピンクを着色する構想であったことがわかる。姉はS児の意図を理解し、マスキングテープをS児に渡す。姉は、風鈴を少しずつ回すことで、S児がマスキングテープを貼りやすいようにサポートする。最後まで巻き終わり、S児は3回拍手した。

表3. 参加者のマスキングテープ使用時のトランスクリプト (※マスキングテープをマステに略)

時間	場面画像	No	行為/発話
5' 55		1	S 白の絵具をパレットに出す
		2	S 「やってみる::」
		3	姉 「うん」
6' 48		4	姉 風鈴にマステを貼ろうとする(a)
		5	S 「ここ(。)この上らへん(1.2)もっと上//」
		6	姉 「//え(0.4)白になるよ」
		7	姉 両手を交互に動かし、色の配置を確かめる
7' 18		8	姉 「白はさんで赤(.)白(.)ピンクってこと?」
		9	S 「うん(0.4)そう」
		10	姉 マステをSに渡し、風鈴を持つ(b)
8' 12		11	S 「まって(0.4)まって::」
		12	S 位置を確かめながらマステを貼る
		13	姉 マステを巻きやすいよう風鈴を少しずつ回す
		14	S 巻き終わり、3回拍手をする(c)

: 音声の引き延ばし (0.4)間合い、0.2秒以下は(.)で示す //直前の発話と密着

4-3. 予備調査からの考察

2023年・2024年実施の公開講座記録から、参加者が求める支援と適した環境について考察する。

2023年の藍染めでは、絞りの模様を形づくることが支援を要する工程であった。表1の参加者の感想には、「どんなもようができるかな?というワクワク感」、「どんな模様になるのか、出来上がるまで分からない」など、絞りの型から出来上がりの模様を想像することの楽しさに言及する内容が多く見られた。また、「あまりできないことができて、とても楽しかった」、「さいしょは、ふあんだったけど、できたらいい感じ」など、普段できない経験に不安がありながらも楽しむことができたことにも触れられていた。これらの背景には、絞りの仕方によって出来上がる模様への期待感が推察される。参加者は、「このようにしたら、こうなるだろう」という見通しを持ちながら作品づくりを行うことによって、多くの工程を経て、時にイメージが予想外の形になっていくことの楽しさを体感したことが考えられた。そのためには、参加者に即した工程の難易度と、子どもにも分かりやすい説明が必要不可欠である。

一方、2024年の風鈴づくりでは、表2にみられるように、「説明がわかりやすく」、「親切にわかりやすく、低学年の子どもも楽しく参加できた」という記述が見られる。また、「『かわいいね』とか『よくできたね』と頻繁に声をかけていただき」、「子どもたちにも声をかけてくださったので楽しく制作できた」などの感想もあった。具体的な色や形を彩色する工程で、説明の分かりやすさ、声掛けによる励まし参加者のモチベーションを高めることが推察された。

また、表3のマスキングテープ使用時のトランスクリプトでは、参加者(S児)の意図を支援者(姉)が理解しようとし、一人では困難な作業を協働で行う様子が確認された。風鈴のデザインは参加者が決定し、それを叶えるための方法を支援者が助言するという形である。他の参加者の感想の中にも「協力し合って作業できたのでよかった」、「コミュニケーションがとれるので良かった」などの感想があり、一つの作品を作るために構想を

伝え合い、実現のための方法を共に思案する様子
がうかがえた。これは、協力することを必然とす
る道具や技法の特性が要因であることが考えられ
た。

5. 本調査「トントンころころビー玉めいろ & サマースノードーム」

開催日 2025年8月3日(日)
開催時間 10:00~12:00
参加者 13組(子ども20名 大人16名 計
36名)
学生スタッフ 4名

(1) テーマと材料・用具について

これまでの調査から、小学生にとって難易度の
高いテーマや経験のない道具の使用が制作への興
味を喚起することが考えられたため、2025年の公
開講座は、くぎ打ちをテーマに行うこととした。

板にくぎを打ち、輪ゴムをかけて道をつくる
「ビー玉めいろ」は、親子で作品のイメージを共
有し、協力して制作することができる考えた。
使用したのは、「トントンくぎ打ちコンコンビー
玉B(アーティック社)」¹³⁾である。全長45cmのコ
リントボードは耐水性ペンでの彩色も可能であり、
ボードの厚み・堅さ共に小学生のくぎ打ちに適し
ていると考えた。

本品は、くぎ打ちと輪ゴムで迷路をつくり、ゆる
やかな傾斜を利用してビー玉を転がすことを想
定したものである。しかし公開講座では、輪ゴム
と木材で発射台をつくることで、遊びを展開でき
るようにした。発射台の木材の接着にはボンドの
使用が必須の為、事前にコリントボードの右下に
一定の間隔を空けて接着しておいた。10cm程の丸
木にくぎを打っておき、参加者が輪ゴムをかける
ことで簡単に発射台がつけられるようにした。

学生スタッフには、事前にくぎ打ちの注意点に
ついて説明し、特に兄弟児の参加が多い親子に重
点的に関わるよう伝えた。教室後方に、PVAを
使ったサマースノードームの制作コーナーを設置
し、対応は全て学生スタッフに任せることとした
ため、制作工程と注意点を確認した。

(2) 公開講座の様子

講座の冒頭で、スライドを用いてくぎ打ちの説
明と注意点の確認を行った。特に、かなづちの持
ち方、打ち込む強さや角度、くぎを持つ手の位置
などである。各自、端材にくぎを打ち込む練習を
行い、ペンチを使ったくぎ抜きの練習も行った。
かなづちを扱うことが初めての子どもが大半であ
り、保護者は、子どもがくぎ打ちを行う姿を見守
り、励ましたり力の入れ方を教えたりする様子が見
られた。

その後、「ビー玉めいろ」制作の全工程を説明し、
各自制作を始めるよう促した。今回の講座では、
図柄の完成に時間差が想定されたため、小刻
みに説明を行うスモールステップの説明形式では
なく、最初に全工程を説明し、資料を見ながら各
自の進捗で制作を進められるようにした。子ども
たちは、プロッキーで思い思いの図柄をコリント
ボードに描いた。鉛筆で下絵を描き時間をかけて
デザインを考える子もいれば、描きながら次々と
新たな図柄を加えていく子もいた(図7)。

くぎ打ちの場面では、保護者がくぎを打ち込む
位置に錐で印をつけ、子がくぎを打ち込むといっ



図7. 台に絵を描く様子



図8. くぎ打ちを行う女児



図9. 学生スタッフによる支援の様子

表4. 「トントンころころビー玉めいろ&サマースノードーム」参加者の感想

<p>参加者の感想（子ども）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分でかいたり、うったりして、楽しかった。 ・くぎをうったり、絵をかくのがたのしかったです。 ・くぎをうつのが少しむずかしかったけど、<u>どんどんなれてうまくできました。またつくってみたいと思いました。</u> ・サマースノードームもつくって楽しかったです。きらきらでかわいいです。 ・とてもたのしかったし、<u>とんかちをとんとんするのが、いちばんたのしかった。</u> ・くぎをうつのが、なまめになったりしてむずかしかった。 ・くぎをうつのが、はじめてだったから、<u>できるかしんばいしていたけど、できてうれしかった。</u> ・とてもかわいい夏っぽい作品ができました。 ・やさしいおねえさんたちが、やさしくおしえてくれたので、とてもわかりやすかったです。 <p>参加者の感想（大人）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親子で楽しく工作することができました。くぎ打ちなどの体験もできて良かったです。<u>子どもも上手にくぎ打ちができて満足そうでした。完成後は、ゴムの位置をつけかえて工夫したり、楽しむことができました。</u> ・初めてかなづちを使っての作業でしたが、<u>先生や生徒さんが手助けして下さったので楽しく工作ができたようです。</u> ・子どもが三人で受講するか悩みましたが、<u>学生の方に手伝っていただき、全員楽しくつくることができました。参加して良かったです。</u> ・子どもの夏休みのいい思い出になりました。<u>学生の方も子どもに寄り添ってくれていたのが楽しく工作できました。</u> ・先生をはじめ、学生の皆さんが気さくに子どもたちに賞賛の言葉かけをしてくださり、<u>子どもは終始ご機嫌に過ごすことができました。夏休みのいい思い出になると同時に、工作まで仕上げることができ、子どもにも親にも win-win の素敵なイベントでした。</u> ・あつという間の2時間でしたが、<u>子どもが集中して取り組めたので、とても楽しい時間を過ごせました。絵をかくことも工作も大好きな娘は、今日をととても楽しみにしていました。</u> ・イラストを考えてくぎを打って、と一連の作業を自分で行うことができてとても楽しそうに作成していました。先生も学生さんも優しく教えて頂きありがとうございました。 ・初めてかなづちを使いましたが、<u>段々と上手に使えるようになる姿を見ることができて嬉しかったです。</u> ・6年生の長女は一人でつくることができ、<u>なかなかできない経験をさせて頂きました。1年生の長男は、意外とくぎが打てていて、びっくりしました。途中で疲れて、くぎは私が打ちましたが、二人とも楽しそうでした。</u> <p style="text-align: right;">※下線は筆者による。</p>

た協力体制が見られた。くぎ打ちに戸惑う子は見られず、力加減を工夫し、斜めに打ち込んでしまった際は反対方向から打ち込むなど試行錯誤する様子が確認された。どの参加者も、経験を重ねる毎に、くぎ打ちのスピードや正確さが増す様子が観察された(図8)。また、多数の兄弟児の参加組には学生が入り、子どもと対話をしながら制作を進めていた(図9)。本講座の「ビー玉めいろ」は、輪ゴムのかけ方を変えることで何通りもの迷路を作ることができる。参加者の中には、完成した「ビー玉めいろ」でビー玉を転がしてみても、輪ゴムをかけ替えたり、くぎの位置を変えたりして遊ぶ様子が確認された。

サマースノードームのコーナーでは、幼児も制作ができるようにしていたため、4・5歳児が学生スタッフと一緒に制作を楽しむ様子があった。また、くぎ打ちがひと段落した参加者は、制作コーナーに行き、好きな色のサマースノードームを制作していた。学生スタッフは、役割分担をして、スムーズに誘導できるよう工夫しながら進めていた。表4は参加者の感想の抜粋である。

(3) 参加親子の相互行為分析

1組の親子のくぎ打ちの際のトランスクリプトを表5に示す。R児は小学2年生男児である。父親によると、R児は元来、制作に対しては意欲的な性格であり、ボードにも迷うことなく絵柄を描く様子が確認された。くぎ打ちを行うのは、今回が初めてである。

「ビー玉めいろ」のボードは、ビー玉が外へ飛び出さないように、四方をくぎとゴムで囲む必要がある。R児の「はじっこは(.) あった方がいいよね::」(表5.No2) というのは、四隅にくぎを打つことで頂点を作ることを意味している。それに対して父親は「うん(0.4) そうやね」(表5.No3) と応答的に返している。

また、R児の「これで(.) いい↓//」(表5.No6) という発言に対して「//いい?」(表5.No7) と返答しているが、色の塗られていない部分を指し「ここ(.) どうする?」(表5.No9) と聞いている。くぎ打ちをした後には着色が難し

表5. 参加親子のくぎ打ちの際のトランスクリプト

時間	場面画像	No	行為/発話
42' 54		1 R	くぎを打つ場所を探す (a)
		2 R	「はじっこは(.) あった方がいいよね::」
		3 親	「うん (0.4) そうやね」
		4 親	ボードの周囲に錐で印をつける
		5 R	くぎを打つ
43' 38		6 R	「これで(.) いい!//」
		7 親	「//いい?」
		8 親	色の塗られていない部分を指さす (b)
		9 親	「ここ(.) どうする?」
		10 R	「じゃ (0.4) まって (0.6) さき」
45' 38		11 R	オレンジのペンを持ち、ボードに絵を描く
		12 親	くぎが貫通していないか、指で触って確かめる(c)
		13 R	絵を描き終え、くぎ打ちを始める
		14 R	「なんか(.) このへん」
		15 R	狭いスペースにくぎを打とうとする
71' 19		16 親	くぎを持ち、代わりに最初の打ち込みを行う(d)
		17 R	くぎが安定したところで、くぎ打ちを代わる
		18 R	ゴムをかけてみる (e)
		19 親	「いいね!::」
		20 R	「いい?」
72' 33		21 R	くぎ打ちの場所を迷う
		22 R	錐で印をつけようとする
		23 親	両手でボードを支える(f)
		24 R	「で (0.4) ここが () 星座の ()」
		25 親	うなずく

： 音声の引き延ばし ↑ 語尾の上がり下がり () 聞き取りが困難な箇所
(.)/(0.6)間合い、0.2秒以下は(.)で示す //直前の発話と密着

いため、事前にR児の意図の確認を行ったことが推察される。また、父親の行為には、くぎが貫通していないか指で確かめる様子(表5.No12)や、狭いスペースにくぎ打ちをする際の支援(表5.No16)、ボードを支える行為(表5.No23)等が確認された。

6. 考 察

6-1. 参加者の課題解決の過程

表5のR児のトランスクリプトから、参加者の課題解決の過程について考察する。2年生のR児にとって、「ビー玉めいろ」制作の工程は複雑であったことが予想される。R児は「ビー玉めいろ」の仕組みを頭の中でイメージし、「はじっこは(.) あったほうがいいよね::」(表5.No2)などと父親に確認しながら制作を進めている。特に、親子の相互行為の過程で着目すべきは、父親が子どもに決定を委ねている点である。それは、父親の「ここ(.) どうする?」(表5.No9)の発話や、ゴムをかける場面での「いいね↑::」(表5.No19)の声掛けの場面にみることができる。子どもがどうしたいのか、どんなイメージを持っているのかを確かめながら制作を進める様子が確認された。

また、父親は、くぎが貫通していないかを触つ

て確かめたり(表5.No12)、狭いスペースにくぎを打つ際に最初の打ち込みだけを支援したり(表5.No16)、R児が錐を使用する場面ではボードが動かないように両手で支えている(表5.No23)。これは、普段のR児の姿から、一人で出来ることと困難なことを理解している故の行為だと考えられた。

今回、R児は、自分のイメージを理解しようとしてくれる支援者に励まされながら制作を進めていった。それは、自分が認められているという安心と、課題解決のための適切な支援を享受できるということである。これは、縣・岡田の示す創造活動の個人にとっての意義である「創造それ自体から得られる快感情」及び「創造に関わる領域一般的な知の獲得」に必要な環境であることが考えられた。

6-2. 創造的教養を育む講座の内容と環境構成

「創造的教養」とは、「1) 創造活動の過程や方法についての理解、及び2) 日常生活の中で何らかの創造活動と親しむ態度や習慣」^[4]の2つの要素が構成する概念である。これらを育むための講座の内容と環境構成について考察する。

まず「創造活動の過程や方法についての理解」については、制作の工程全体を低学年児の理解度に合わせて説明することが必要である。支援者である大人にとっては、活動の過程や方法について、ある程度の予測が可能であろう。しかし、表3のS児や表5のR児の事例から分かるように、「こうしたい」という子どもの思いが湧きあがるためには、自分で方法や仕組みを理解する必要がある。したがって、参加者である子どもを主体として講座の内容を組み立てていくことが肝要であることが考えられた。

また、道具の使い方の説明についても、挑戦したくなるような場面の設定が、参加者のモチベーションを高めることが予想された。例えば、藍染めの絞りの模様の作り方、マスキングテープの使い方、くぎの打ち方などは、実演による説明とその結果を見せることで、制作のイメージが湧くことが推察された。また、自分で思考し、理解した

活動の過程や方法は、楽しさの経験と共に子どもの記憶に残ることが考えられた。

次に、「日常生活の中で何らかの創造活動と親しむ態度や習慣」の育成について、造形をテーマとした公開講座の可能性を探る。

公開講座の参加者は募集によるため、参加親子は少なくとも創造活動に興味がある親子だと予想される。したがって、元来、「創造的教養」の素地があるということも考えられる。子どものアンケート回答には、「できるかしんばいしていたけど、できてうれしかった」、「またつくってみたいと思いました」など、制作の過程でものを作ることへの不安が解消され、次へ想いを馳せる記述があった。

一方、大人のアンケート回答には、「子どもが集中して取り組めたので、とても楽しい時間を過ごせました」、「イラストを考えて、くぎを打って、と一連の作業を自分で行うことができるとも楽しそうに作成していました」など、子どもが自身の力を使って能動的に制作に取組む様子に喜びを感じている様子がうかがえた。また、「1年生の長男は、意外とくぎが打てていて、びっくりしました」の記述からは、本講座が、保護者が日常生活では知り得なかった子どもの成長を確認する機会となったことが分かった。これらの記述から、造形をテーマとした公開講座が、今後の創造活動への親しみや期待につながる可能性が考えられた。

本講座のアンケート記述から、①子ども自身が工程を理解し、試行錯誤することができる活動の説明や方法の提示、②子どもの制作に対する不安が解消され、次への期待感につながる内容、③子どもの発達に合わせた大人の適切な支援、によって公開講座が創造的教養を育む契機となることが考えられた。

7. まとめと今後の課題

本稿は、公開講座の参加者が、他者との相互行為を通して自己の課題を解決するプロセスを分析し、講座の内容、及び人的環境を含む環境構成について検討することを目的とした。そして、3回の講座結果から、「創造的教養」を育むための公

開講座について検討した。考えられたことを以下に示す。

- 1) 子どもの行為予測を行い、工程の難しい部分を事前に把握しておくことで、課題解決のための方法を提案することができ、参加者の創作活動の満足感につながる。(学生スタッフが事前に制作を体験することで、つまずきの場面が予測できる。)
- 2) 保護者や学生スタッフによる声掛け、励ましなどの支援が、子どものモチベーションを持続させる可能性がある。
- 3) 講座のテーマは、親子で構想を伝え合い、実現のための方法を共に思案できる内容が適している。
- 4) 自分のイメージを理解しようとしてくれる支援者と、発達に応じた適切な支援によって、子どもが「創造それ自体から得られる快感情」、「創造に関わる領域一般的な知の獲得」を得られる可能性がある。
- 5) 公開講座が創造的教養を育む契機となるためには、①子ども自身が工程を理解し、試行錯誤することができる活動の説明や方法の提示、②制作に対する不安が解消され、次への期待感につながる内容、③子どもの発達に合わせた大人の適切な支援、の3点が必要である。

今回の調査対象である本講座の参加者は、少なからず創造活動に興味があると考えられる。今後は、例えば課外のワークショップや、地域のイベントにおいて一般の市民が創造活動に触れる機会を提案していきたい。そして、多様な人々が「創造的教養」を育むことができる環境について検討することを今後の課題とする。

註

- 1) 縣拓充・岡田猛, 2013, 「創造性の主体者としての市民を育む:『創造的教養』を育成する意義とその方法」, *Cognitive Studies*, 20(1), p. 27
- 2) 同上, p. 27
- 3) 同上, p. 29
- 4) 同上, p. 29
- 5) 同上, p. 29
- 6) 同上, pp. 30-34
- 7) 同上, p. 34

- 8) 井庭崇, 2019, 井庭崇 (編著)『クリエイティブ・ラーニング 創造社会の学びと教育』, 慶應義塾大学出版会, p. 14
- 9) 西野範夫, 1997, 穴澤秀隆 (編)『美育文化7月号』, 美育文化協会, p. 56
- 10) 山中慶子, 2025, 「短期大学における地域貢献としての造形講座の検討ー小学生親子対象の公開講座実践からー」『長崎女子短期大学紀要』第50号, pp. 18-19
- 11) 内容: 紺屋藍10g 藍溶解剤125g 藍色止め剤20g
ゴム手袋 説明書 (2,420円税込)
- 12) サイズ: 65径×80mm 表面は吸水性があり、クレヨン・マーカー・色鉛筆・水性絵の具などでの彩色ができる。(638円税込)
- 13) 内容: コリントボード (450mm×150mm) 真鍮釘
輪ゴム ビーズ 釘トレイ 紙素材の支柱・羽根車・コース台紙 (410円税込)
- 14) 前掲註1), p. 34